●事例紹介●

『麗澤教育』の発刊について
～建学の精神の継承と広報～

井出元（いではじめ）
（麗澤大学学長補佐）

一　発行の主旨

本誌『麗澤教育』は一九九五年に創刊された年刊の雑誌で、私学の置かれた厳しい環境の中、麗澤大学の教育のあり方を探求していくための対話の場として発行されたものである。本学の創立は一九三五年（昭和一〇年）にまでさかのぼり、「知徳一体」の理念に基づいた人間教育を目指す私塾であった。人間教育とは広範な概念であり、時代の動向に敏感に対応していくことが重要である。そこで麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について教職員・学生・部活動の指導者・保護者・卒業生などがお互いに議論を深め、それぞれの実践や情報を報告しあう場として『麗澤教育』の発行が企画されたのである。このように本誌は、いわば内部向けの雑誌であった。

しかし、高校訪問をした時、進路指導の教諭が、「生徒に麗澤大学を紹介するのに、この『麗澤教育』という雑誌は大変重宝しています。生徒たちの求めるものによって特集ごとに使い分けています」と話してくれたことが、本誌の持つもう一つの意味を示唆するものであった。

では内部向けの雑誌が、どのような意味で広報誌の役割を果たすこととなったのか。このことは、本誌の内容を見ることによって自ずから明らかとなるであろう。

二『麗澤教育』の内容

創刊号では、廣池幹堂学長（当時）の「麗澤教育のめざすもの（知徳一体の教育）」を巻頭に収めた。その中で創立者廣池千九郎（一八六六～一九三八）の遺志に触れ、情報化、国際化の進む時代状況に対して、一層高い人間性、道徳性が求められており、人間教育を中心にすえる本学の教育理念は時代とともにその必要性が高まってきたと鼓舞し、今日の教育界の知育偏重の傾向に対して、高い知性に見合うだけの道徳性を有する人材の輩出が求められていると、本学創立の意義を述べている。

さらに、本号では、創立者廣池千九郎の後継者として廣池千英初代学長の業績や、現在本学で教鞭を執っている本学出身の教員が、麗澤教育の特色を各自の立場から論じた手記が収められている。建学の精神を継承し、それを現代において展開するという確認は、教職員、在学生に対して自覚を促すものであり、それは同時に本学の特色を紹介する上で基礎的な内容となっている。

第二号（一九九六刊）では、教職員のほかに在学生の手記が収められた。大学祭の実行委員長や卒業生の手記、そして、麗澤大学における課外活動の現状が顧問の教員によって紹介されている。教室での授業のほかに、人間性を培う場として課外活動を位置づけている本学にとって、課外活動は学生の実践の場として最も重視されなければならないものであった。課外活動の実態は本学の学風を伝える具体的な事例となり、大学生活に夢を馳せる受験生にとっても重要な情報である。

第三号（一九九七刊）では「女子学生への提案」「課外活動レポート」「建学の理念をめぐって」という項目が設けられた。「女子学生への提案」のコーナーは年々増加の傾向にある本学の女子学生への啓発を目的として、本学の女性教授に執筆をお願いした。自らの半生を踏まえた提案は女子学生のみならず多くの学生を啓蒙するものであった。

「課外活動レポート」では課外活動に向けられた学生の情熱や学生課の支援、さらに顧問・コーチの地道な努力の足跡に関するレポートであり、課外活動の実態については学

生の代表が執筆している。

本号以後、多くの学生の意見を収録することになったのは、本誌が在学生にも広く読まれるようになった一因である。また受験生が読むことによって広報用の冊子では知ることのできない在学生の生の声が聞けることになったのである。学内向けの雑誌が同世代に対して広報の意義を持ち始めたきっかけであった。

第四号（一九九八刊）では「私の出会った人・出来事」という特集を設け、恩師やことばとの出会いを中心に、教員がそれぞれに自らの人生の転機を論じたものである。これらの手記によって、読者は本学の教育の特色を教員の実体験を通して具体的に知ることとなり、学生たちは教員の一人一人の人間性を知り、教員と学生との関係がより親密になっていったと考えられる。それらは同時に受験生にとって大学の学風を知る上で貴重な情報である。

第五号（一九九九刊）では「麗大を支える人々」を特集し、恩師を語る手記や課外活動を支えた人々が紹介された。教職員にとっては先人の業績を偲ぶものであり、課外活動に参加している学生にとって自分の部活動の歴史を知ることとなった。また受験生が読むことによって、歴史的な具体的事実から本学の学風を読み取ることができるのである。

その他本学の特色である道徳教育の授業報告のコーナーや大学祭の頁なども特設され、本学の教育の歴史や実態を知る上でも大切な号となった。

第六号（二〇〇〇刊）では「留学を考える」を特集し、まず教員による留学の意義に関する手記を収め、日本人学生の留学経験、外国人学生の日本での留学体験という双方向から留学の意義を問うことを意図した。

海外留学に対する不安を抱える在学生や本学で学ぶ留学生にとっても、さらに将来留学を考えている高校生にとっても、留学経験者の体験談は重要な意味をもつものであることはいうまでもない。本学の教育の特色を端的に示すものとして貴重な号となった。

第七号（二〇〇一刊）では「卒業生、麗澤を語る」を特集し、一二名の卒業生の手記が収録されている。どれも近

況の報告と同時に、卒業生として母校で学んだ四年間を振り返り、在学中にはわからなかったもの、卒業して初めて理解できたことなど率直な気持ちを綴っている。

とかく教育の成果として就職先とか就職率に目を奪われがちな昨今、一人の学生の卒業後の動静はデータでは表すことのできない教育の成果であり、在学生からすれば先輩からの伝言である。また受験生からすれば卒業後の進路は最も気にかかる問題であり、卒業生の社会人としての実績を示す記事は興味を引くものである。

第八号（二〇〇二刊）では「**麗澤大学の専門ゼミ**」を特集し、本学外国語学部で開講されている、三・四年生対象の「専門コースゼミナール」（卒業研究）が四二講座、一年生を対象とした教養ゼミナール一五講座、国際経済学部の二・三・四年生対象の専門演習（学科ごとのゼミナール）三九講座、二・三・四年生対象の基礎・学際ゼミナール一〇講座のテーマが紹介されている。

このゼミナールの紹介は、「小人数教育による人間教育」をモットーとしてきた本学の教育の範囲を具体的に知ることができるものであり、担当の教員と数人のゼミ生の手記がセットになって自分たちのゼミを紹介している。学生の手記は、教員の側からすれば、教育成果の確認となり、発言の場を与えられた学生にとってはゼミ生としての自覚を高めることとなったと考えられる。

ゼミナールは担当教員の個性が直接表われるものであり、自分の関心に照らして大学を選択しようとしている受験生にとって貴重な情報となると考えられる。

第九号（二〇〇三刊）では「**外国人から見た麗澤大学（ここがヘンだよ、麗大生）**」を特集し、一四人の外国人留学生による率直な手記が収められている。現在（二〇〇六年度）、本学には二一か国、五七八名の外国人留学生が在学している。彼らの素直な意見を収録したことは他の外国人留学生の共感を呼ぶものであり、異国での生活を勇気付けるものであった。

また、外国人留学生の率直な意見は、日本人学生にとって自分の真の姿を映し出す鏡のような役割を果たしたようである。巻末に座談会「学内における異文化間交流を深めよう」の記事は外国人留学生、日本人学生それぞれ三人ずつの座談の記録で、異文化交流が重視されている現代にお

いて読み物としても楽しい企画である。

第一〇号（二〇〇四刊）では「**いまどき道徳？　いまこそ道徳！**」と題して、本学の道徳教育の現状と課題を特集として取り上げ、担当する教員による教育の事例、また専門教育の立場からの道徳教育、さらに学生によるボランティアや課外活動、寮生活などの「実践活動」が紹介されている。

中でも受講した学生の手記や実践報告は点数や順位では評価することのできない教育成果を示すと同時に、学生のキャンパスライフ全体を教育の場と考える本学の特色を具体的に示すものとなった。受験生の立場からすれば、大学生活の広がりを知ることになるであろう。

第一一号（二〇〇五刊）では「**教養教育**」を特集し、一一名の教員がその専攻する最先端の研究分野を紹介しつつ、現代人にとっての教養とは何かを問いかける手記を収録し、広く一般に対しても示唆を与える内容である。また受講した学生八名がそれぞれ受講した感想を述べている。

教養教育は学生一人一人の世界を拡げ、その人間性を高めていく上で重要な科目である、という本学の理念を具体的に知ることができるであろう。大学で学ぶということを根本的に問い質す企画であり、受験生にとって高校と大学との差異を知ることになると考えられる。

第一二号（二〇〇六刊）では「**外国語を学ぼう**」と題し、教員・学生・卒業生、さらに留学生、合計二二人がそれぞれの立場からの手記を収録し、外国語教育の意義を特集した。取り上げられた外国語は英語、ドイツ語、中国語、韓国語、フランス語、タイ語、ベンガル語、ヒンディー語、スペイン語、フィンランド語など多彩であり、さらに、留学生による日本語の学習についても紹介されている。

外国語教育を重視する本学の教育を理解する上で重要な意味を持つものであり、将来外国語を学ぼうとする人に対しても十分に示唆的な企画であった。

なお第四号から巻頭に「オピニオン」というコーナーが設けられたことにより、現在本学の目指している方向を確認することができるようになった。このことは、教職員をはじめ学生にとっても、在職、在学の意義を自覚させるものとなり、また受験生にとって大学を選択する上で重要な

資料となるであろう。

さらに第九号より「温故知新」というコーナーが設けられ、本学の歴史を具体的なエピソードを通して知ることができる。このコーナーが設けられたことによって本学の特色をその七〇年の歩みを通して知ることができるのである。大学の伝統は多くの先人の努力によって育まれてきたものであり、それを知ることは教職員をはじめ学生諸君にとっても在職、在学していることの自覚を促すものとなった。

三　広報誌としての役割

冒頭に述べたように本誌『麗澤教育』は、本学のあり方を自問し、模索することを目的とした百数十頁の小冊子である。それは現在を起点として過去をたずね、未来を志向することを縦軸とし、学生と教職員、日本人と外国人との対話を横軸として本学の実態をきめ細かく報告し合うものであった。

その内容は学内向けのものであるだけに、衆目を意識せずに、時には厳父として苦言を呈し、時には慈母のごとく優しく学生を包み込み、さらに反抗期の子どものような忌憚の無い意見も収録されている。このような本誌の性格が、かえって麗澤大学を知ろうとする人にとって新鮮な情報となっているのである。ことに学生の手記は点数に表すことのできない教育成果を物語るものであり、教員の思いと併せて読むことによって、本学の特質を仔細に知ることができるであろう。

以上、縷々述べてきた意味において、内部情報誌『麗澤教育』は、図らずもそのままの形で、受験生に対して、本学の実情をきめ細かく伝える広報誌の役割を果たすこととなったのである。